

新潟・佐渡沿岸における 海産哺乳類の漂着記録再調

本間義治（新潟大理）・山田格（新潟大医）

Revised Records of the Marine Mammals stranded
on the Coast of Niigata and Sado Island in the Sea of Japan
by Yoshiharu HONMA and Tadasu K. YAMADA

さきに、著者らの一人本間は、江戸時代に残された記録も加え、新潟県沿岸におけるクジラ類漂着の傾向について論述した（本間，1981；本間・北見，1981）。この資料と、魚類の紐体類や海産爬虫類，大型イカ類の漂着傾向とを比較検討したところ，各動物群ないし種間に，興味深い差異のあることが分った。

ところが，1986年にストランディング・レコード欄が『鯨類通信』（鯨類研究所）の中に設けられたり，1988年末には“日本海セトロロジー研究グループ”が結成されたりした。このことが契機になって，にわかに多くの漂着記録が寄せられるようになった。したがって，これらの資料も加え，改めて漂着現象を解析する必要が生じたのが本稿の趣旨である。

1. クジラ類

近年における31例中，漂着年月日の不明なもの2例，羅網が10例，漂着が19例で，ヒゲクジラ類が最も多い。次いでMesoplodonを含むアカボウクジラ科の8例で，1984年から出現し，注目を惹いている。クジラ類は8月を除けば，どの月にもみられ，特定の月に集中することはない。これに比し，古記録は種名が一切不明なもの，4～5月に多いという特徴がある。

2. イルカ類

比較的近年の資料25例しか集まらなかったが，きわめて興味深い傾向が明らかとなった。すなわち，8～12月の間は1例もなく，厳冬季ことに2月に最も多く漂着しており，イシイルカが半数を占めている。これらは，南下して日本海で越冬中の群れの一部とみなされ，突ん棒による外傷を負っている個体もあった。

3. 鯖脚類

江戸時代の古記録8例は，種名不詳であるが，2～5月に限られ，海獺（うみおそ）が最も多い。これが現在絶滅の危機にあるニッポンアシカとは特定できない。

近年の18例中では，アザラシ類，次いでオットセイが多く，これらは秋～冬は南下，春は北上して索餌（サケ・マス類）回遊する個体と思われる。

4. まとめ

自泳力の強い海産哺乳類の漂着現象は，対馬暖流が長距離運搬し，無効分散に終

わる熱帯・亜熱帯系動物のそれとは範疇が異なる(本間, 1973, 1975, 1978, 1983/84, 1984/85)。しかし, 冬季における新潟海岸への打ち上げ機構については, 変わらないといえるが, 漂着集中の時期が小型の種ほど早く(秋), 大型のものほど遅い(冬→春)という現象は注目されてよい。

今回は, 要旨のみに留め, 本報は, 1991年3月までに印刷の予定である。なお, 本研究グループメンバーの参照に供するため, 1988年12月の日本海セトロロジー研究グループ資料に本間データと注記のある資料以降に蒐集された記録を付すことにした。

5. 引用文献

- 本間義治. 1973: リュウグウノツカイとサケガシラ. 蒲原, (33), 43-52.
- 本間義治. 1975: 新潟地方へ漂着するウミガメとウミヘビ. 蒲原, (39), 25-36.
- 本間義治. 1978: 組織像より推定した中部日本海における漂泳漂着動物の生活. 動物と自然, 8(1), 9-15.
- 本間義治. 1981: 寄鯨と鯨霊塔. 蒲原, (61), 24-40.
- 本間義治. 1983/1984: 大王烏賊と袖烏賊. 蒲原, (65), 61-68; (66), 31-36.
- 本間義治. 1984/1985: サメとフカとワニと. 蒲原, (67), 19-26; (68), 12-19.
- 本間義治・北見健彦. 1981: 新潟・佐渡近海における海産哺乳類の分布と往時の記録. 日本生物地理学会会報, 36: 93-101.